

日本オースティン協会第 15 回大会
オースティン協会・ジョージ・エリオット協会共催シンポジウムのお知らせ

日時：2022年6月25日（土）14:30～17:00

場所：Zoom を用いたオンライン開催

*詳細は、大会プログラムと共に後日連絡いたします。

テーマ：「アン・ラドクリフ再考——作品が生まれた土壌とその影響」

司会・講師 三馬 志伸（オースティン協会）

講師 大河内 昌（東北大学教授・オースティン協会）

講師 小川 公代（上智大学教授・オースティン協会）

講師 木村 晶子（早稲田大学教授・エリオット協会）

アン・ラドクリフが 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのゴシック小説大流行の立役者であったことはつとに知られるところで、また、その後のミステリーやホラー小説の発展にも多大な影響を与えたことも今日では広く認識されている。しかし、ラドクリフという作家の重要性は、決して恐怖小説という文学のサブジャンルの中だけにとどまるものではない。ホレス・ウォルポールやクレアラ・リーヴらの恐怖小説を受け継いだというだけでなく、バークの美学理論を根底に据え、18 世紀後半に礼讃された「感受性」の問題に真っ向から向き合うなど、その作品はこの時代の思想的背景に深く根を下ろしているのであり、そうして練り上げられた重厚な物語は、単なる恐怖小説の枠を超えて、同時代および後の世代の文学全般に互って大きな影響を及ぼしてきたといえるのである。今回のシンポジウムでは、そうしたラドクリフ作品の持つ意味を、いろいろな角度から改めて吟味し検討してみたいと考えている。

発表要旨

ゴシックと道徳哲学——家庭小説として『ユドルフォ城の怪奇』を読む

大河内 昌

アン・ラドクリフの小説の特徴は、ゴシック小説の枠組みの中に若い女性の成長と結婚を描く家庭小説のプロットを組み込んだことにある。この結合によってラドクリフは作家としての人気と尊敬の二つを手に入れることに成功した。家庭小説とは、リチャードソンからオースティンに流れてゆく小説のサブジャンルで、美德あるヒロインが望ましい結婚とい

うかたちで「美德の報い」を受ける物語である。美德ある女性を描く家庭小説は、洗練された感受性という「女性的な美德」によって社会秩序を構築しようとする道德哲学のプロジェクトと共通する要素が存在している。今回の発表では『ユドルフォ城の怪奇』に見られる家庭小説的な筋立てと道德哲学の関係を分析し、この作品においてゴシック小説と家庭小説の結合がどの程度成功しているのかということを考えてみたい。また、家庭小説のひとつの完成形であるオースティンの小説とラドクリフ作品の違いから見えてくる文学史的意味についても考察する予定である。

『ユドルフォ城の怪奇』と医科学言説——死者から生者へ

小川 公代

アン・ラドクリフの『ユドルフォ城の怪奇』では、超自然現象と思われる場面が死者の再訪などではなく、合理的な説明が与えられる。それは、個人の感受性／感覚性 (sensibility) とそれがもたらす想像力が重要視された医科学言説と地続きであるだろう。十八世紀の神経医学の勃興により、身体感覚性や生気論的な生理学への関心が高まったことにより、デカルト主義の二元論が疑問に付され、自然科学の領域（無生物の機械作用）と人間の精神の領域（人間の道徳的行為）とのあいだの溝が埋められたともいえる。人間や動植物のような有機体が外的な「刺激」にどう反応するかが予測不能であることも意味する。感受性は、破壊的、あるいは危険なまでに制御不能といった負の作用を生み出すことがある一方、他者の苦しみを感受する道德感情の表れとも認識される。本発表では、ラドクリフ作品がいかにかに死者ではなく、有機体の生命運動を描こうとしていたかに注目する。

オースティンとラドクリフ

——『ノーサンガー・アビー』は『ユドルフォ城の怪奇』のパロディーなのか？

三馬 志伸

ジェイン・オースティンの『ノーサンガー・アビー』は、ゴシック小説、特にアン・ラドクリフの作品のパロディーであると見られることが多いが、オースティンがこの作品で試みようとしたのはほんとうにただのパロディーだったのであろうか。確かに物語の後半において、ゴシック小説にかぶれたキャサリンは、妄想をたくましくして頓珍漢な勘違いを重ね、しまいにはティルニー将軍に妻殺しの嫌疑までかけ、ヘンリー・ティルニーに手厳しい説諭を受けるのであるが、それだけをもってこの作品を「パロディー」と決めつけるのはいささか早計であるような気がしてならない。今回の発表では、『ユドルフォ城の怪奇』をはじめとするラドクリフの小説の特徴を考慮に入れながら、『ノーサンガー・アビー』におい

て作者がラドクリフ作品をどのように扱っているのかを改めてじっくりと検討し、オースティンにとってラドクリフという作家はどういう存在であったのか、そしてこの作品におけるオースティンの真の狙いは何だったのかを探ってみたいと考えている。

ラドクリフとヴィクトリア時代の女性作家たち — 『ユドルフォ城の怪奇』の文学的遺産

木村 晶子

18世紀末のゴシック小説ブームは1810年代には終焉を迎えたとはいえ、絶大な人気を誇ったアン・ラドクリフの文学は、後のヴィクトリア時代の女性作家たちにも少なからぬ影響を与え続けた。「ゴシックの女王」と称されたラドクリフの小説は、超自然現象に見えたものには合理的説明をつけ、恐怖を掻き立てることより、ヒロインの恐怖の克服と感受性の抑制を重要なテーマにしている。ロマン主義的想像力と、女性に要求された道徳性の稀有なバランスを追求した文学とも捉えられるのではないだろうか。孤独なヒロインが、さまざまな逆境や監禁状態を乗り越えて、精神的成長を遂げるラドクリフの主題は、ヴィクトリア時代には、より意識的な女性の自我と自立の問題として探求されてゆく。今回の発表では『ユドルフォ城の怪奇』に焦点を当て、ラドクリフの文学的遺産が、シャーロットとアン・ブロンテ、ギヤスケル、エリオットの作品にも見られることを考察したい。